

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03124

研究課題名（和文）20世紀初頭の中国における軍制の変遷と政治統合

研究課題名（英文）Military System and Political Integration in Early Twentieth Century China

研究代表者

吉澤 誠一郎（Yoshizawa, Seiichiro）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：80272615

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：中国近代史を、軍事をめぐる制度と観念に着目しながら再検討することをめざした。まず、19世紀後半の清朝が如何なる軍事的なインパクトを受け、どのような改革を迫られていたのかについて論じた。曾国藩は、理念によって統率された軍隊の創出をめざしていたが、それは20世紀初頭の軍制改革において参照され、近代軍の精神的基盤を重視することの先駆とみなされた。また、辛亥革命にみる軍人の忠誠の問題について考察した。中華民国の初期大總統の就任儀礼について分析し、その軍事的な要素に注目した。そこには、従来の皇帝と異なり、中華民国の軍を統率する者としての立場を明確にする意味も込められていたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、軍事に着目して中国近代史を再考することをめざした。従来の社会経済史や政治外交史といった研究の主軸からは軍事史は外れており、研究の蓄積は不十分である。しかし、当該時期の歴史を理解するためには、清朝や中華民国がいかなる軍事的な課題に直面していたのかについて正面から論じることは重要である。それは、政治秩序や科学技術など広範な論点に関係するからである。また、この研究は、同時期の日本の歴史について理解を深めることにも貢献できるだろう。

研究成果の概要（英文）： This project aimed to reconsider the modern history of China from the perspective of its changing military system. Firstly, in the second half of the nineteenth century Zeng Guofan dreamt to create some military forces united by a common ideal, and his trial was considered as a prototype of modern army when a new military system was introduced to China in the beginning of the twentieth century. Secondly, the loyalty of military forces was a keen issue in the Chinese revolution of 1911. We can find some military factors in the rituals of presidential inaugurations in the early years of republican China, because a new president should be the commander of military forces, and these factors showed a clear contrast to the old system of emperors.

研究分野：中国近代史

キーワード：中国 軍事 革命

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究史との関連

中国近代史研究において、軍事史は、政治外交史や社会経済史といった既存の研究の軸からは外れており、概して研究が遅れてきた分野だといってよい。もちろん、いくつか古典的な研究はあるものの、依然としてその重要性に見合った研究蓄積があるとはいえない。

20世紀初頭の時期を中国軍制にとって大きな転換期とみるのは、通説といえようが、その政治的・文化史的な意義については、未解明な点が非常に多い。たとえば、辛亥革命は、武昌における「新軍」の蜂起から始まったことから、軍隊内部における革命宣伝についても、一定の注意は払われてきた。しかし、そもそも革命とは、既存の体制に対する反逆に他ならない。指揮命令システムを重視し忠誠を尊ぶはずの軍隊において、なぜそのような反逆が可能になったのかという点については、これまで必ずしも正面から問われることがなく、漠然と革命イデオロギーの正当性が想定されてきたように思われる。しかし、清朝としても、当然ながら、軍隊の忠誠を確保する方策をとってきたはずであり、とすれば革命宣伝とは、そのような既存の忠誠を動揺させ、自らの陣営に取り込もうとする心理操作を含んでいたとみられる。これは、ナショナリズムの影響力が作用していたと考えられる。

### (2) 研究代表者自身の研究の展開

当該時期のナショナリズムの展開については、研究代表者自身が一定の検討を進めてきたテーマではあるが、軍事に即した考察は課題として残されていた。その後、研究協力者として科研基盤(B)「軍事史的観点からみた18～19世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」(2014年度～2016年度; 代表は早稲田大学谷口眞子教授)に参加してヨーロッパ史・日本史との比較研究を進めるなかで、軍隊の忠誠心の観点から20世紀初頭の中国政治を再考することの重要性を意識するようになった。また一名で推進した科研基盤(C)「20世紀初頭の中国における帝制と共和制の論理」(2014年度～2016年度)では、とくに憲法や国家儀礼に注目して、清朝末期における君主制の再構築や、中華民国初年の大総統像の形成について研究したが、そのなかでも軍の統帥権の問題は未検討のまま残された。以上のように、本研究課題は、これまで共同研究や個人の科研などを通じて研究を進めてきた結果として、次に取り組むべき論点として浮上してきたものである。

## 2. 研究の目的

### (1) 清末社会意識における軍事の位置づけ

「良い男は兵にならない」という諺は、清末の軍制改革のなかで克服すべき社会意識として、しばしば言及されていた。すなわち、軍人が名誉ある任務であるという社会意識を育むことが急務とされていたのである。確かに科擧の廃止も関係して、軍隊に入ることが社会的上昇の一つの手段とされていく傾向は認められる。また、清末に喧伝された「軍国主義」は、国民形成論の一種であるが、軍の編成をアナロジーとして利用するという特徴があった。梁啓超編『中国之武士道』が孔子を敢えて武士道の体現者とするように、従来の「文治」理念を解体しようとする試みがなされたと思われる。しかし、どれほど具体的に軍隊の社会的評価が変化したのかを考察してみる必要があり、その背景にある政治秩序観や学知についても解明を進めるべきである。このことは、袁世凱・黎元洪・段祺瑞など軍人出身の中華民国首脳が獲得できた政治的正当性とも密接に関わっている。また、軍事意識とジェンダー再構成も留意すべき論点である。

### (2) 軍制の再編と忠誠の問題

20世紀初頭の中国政治史を、軍事をめぐる制度と観念に着目しながら再検討することをめざすとき、辛亥革命が大きな画期となる。そもそも辛亥革命とは、武昌を皮切りとする軍隊の反乱として展開していき、結果として、北洋軍を掌握した袁世凱政権を成立させることになったのである。その過程には、軍隊の規律と深く関係する「忠誠と反逆」の問題が伏在していたことに注目したい。

従来は、清朝が打倒されて革命政権が登場するのが歴史の当然の流れだと暗黙の裡に想定されていたため、清朝に対する軍の「忠誠」は如何に確保されていたのか、そのうえで清朝に対する軍の「反逆」はなぜ生じたのかという問いそのものが閑却されてきた。また清朝が日本の軍隊制度を参照したことは指摘されてきたが、日本軍の「忠誠」にとって核心をなす天皇の統帥権をどのように理解して導入しようとしたのかは論じられなかった。しかし、この点に注目すれば、中華民国の大総統となった袁世凱政権に至るまでの国制構想を深く理解できるはずである。

軍事力がこの時期の政局の動向を規定したことは研究者周知の事実であるが、おおむね軍隊が外在的に政治情勢に介入するようになす観点が根強い。これに対し、本研究は、軍隊の政治的・社会的位置づけの変遷を正面から考察することで、新しい辛亥革命像を提示することをめざした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 史料の把握

基本的な文献を十分に把握するとともに、新しい史料を見出そうとした。

とくに、本務校より与えられた特別研究期間を利用して、台湾の中央研究院近代史研究所に半年滞在し、関係史料の把握に努めた。また、他の資金で調査をすることのできたイギリスの国立文書館(NA)においても、貴重な史料を撮影することができた。

また、校務のあいまには、東京で利用できるマイクロフィルム史料を利用することに努めた。当時の中国の軍制改革については、外国からも強い関心もたれており、中国語史料とは異なる立場からの冷徹な分析がこれらの史料に含まれていると期待されるからである。関連史料としては、最近の影印出版によって利用可能になったばかりの雑誌『武学』のように、史料の性格そのものから慎重に考察すべきものもある。

#### (2) 史料の分析、論考の作成

史料の読解を進め、論文の作成をすすめた。論文作成にあたっては、これまで自分としての把握が不十分だと感じられる軍事史一般について理解を深めるとともに、日本・欧米の憲法学や国法学において、軍隊がいかに位置づけられていたのかという学説史についても理解を深めた。なぜなら、20世紀初頭の官僚・知識分子が参照していた理論的前提を正確に把握することが不可欠と考えられるからである。

### 4. 研究成果

#### (1) 清代の軍制の歴史的位置づけ

発表に至った論考としては「危機のなかの清朝」において、19世紀後半の清朝が如何なる軍事的なインパクトを受け、どのような改革を迫られていたのかについて論じた。そのなかで、曾国藩の軍事思想に注目した。曾国藩は、李鴻章との議論の中で、兵器の改良よりもまず、理念によって統率された軍隊の創出をめざしていた。これは必ずしも保守的な精神論ではなく、20世紀初頭の軍制改革において参照されるような近代軍の精神的基盤を模索したものと理解されることを指摘した。軍事史においては、とかく技術の近代化ばかりに注目することが多いが、蔡鏗といった20世紀初頭の軍人は、曾国藩の精神論の中に近代軍が備えるべき特質を見出していたのであった。

また、やはり公刊に至った「近代世界のなかの日本と清朝」では、清朝の歴史的な性格を長い射程のなか位置づけ、両者の統治構造や政治意識について整理した。そのうえで、19世紀末における日本の軍事的擡頭が清朝に何をもちたのか、その模倣と反撥の作用の一環として軍事分野も重要な役割を果たしていたことを視野に入れながら、考察を進めることができた。

#### (2) 辛亥革命と軍

日本西洋史学会において「辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆」として発表を行った。この報告は、軍人による革命や蜂起という現象を忠誠心との関係から考察したものであり、また当該時期の中国の軍事を国際的な文脈の中で理解していくことをめざした。新軍の蜂起は、指揮系統に忠実であるべき軍隊が、清朝を裏切ったということの意味している。少なくとも清朝政権から見て裏切りと理解するのは、ごく自然なことであろう。とくに問題となるのは、清朝は彼らの忠誠心を確保するためにどのような措置をとりえたのかという点である。そこで、軍紀を維持するための措置や、功績に対する報奨などの制度の整備について考察し、「忠誠と反逆」の問題の実態に迫ろうとした。

また、中華民国の初期大総統の就任儀礼に関する論考を発表することができた。これによれば、孫文が臨時大総統に就任した式典は、軍事的な色彩が強かった。孫文は軍服のように仕立てられたカーキ色のスーツを着て式典に臨んでおり、式次第においても軍人が不可欠の役割を果たしていた。また袁世凱の正式大総統就任式典には閱兵式が付随しており、軍を統率する者としての立場を明確にする意味が込められていたといえる。

#### (3) 軍と諜報

イギリス外交文書を利用しつつ、北京に滞在する駐在武官による情報収集に注目して考察を進めた。英国の駐在武官は、たとえば潜在的に警戒すべき国家のメンバーが探検活動の名目で軍事的な偵察を中国の国内で行うことに目を光らせており、北京の懇親会の場などで聞き込みを行って本国に報告し、また関係する在外公館やインド政府と情報交換を行っていた。そしてこのような北京の外国公館による軍事情報は、中国政府の政策とも複雑な関係を有していたのである。

#### (4) 軍事をめぐる学知

軍隊をめぐる知識や情報という視点からの考察をおこなった。具体的には、欧米の軍事知識が

いかに中国へと伝えられたのか、軍事に関する翻訳文献の研究を進めた。清末の翻訳活動は以前から注目されてきたテーマであるが、これまでは欧米の政治・経済・思想の導入という関心が強すぎたため、翻訳活動のなかで軍事技術ないし軍隊運営が非常に重視されていたことが閑却されてきた。これに対して、本研究では、辛亥革命に至る時期の「軍事をめぐる学知」の重要性を明らかにすることに努め、清朝末期においても貪欲な軍事知識の吸収が見られたことがわかった。その知識がどのように活用されたのかについては、なお検討中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 近代日本の中国城市指南及其印象：以北京、天津為例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 巫仁恕主編『城市指南与近代中国城市研究』開源書局	6. 最初と最後の頁 319-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 近代世界のなかの日本と清朝	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 波多野澄雄・中村元哉編『日中戦争はなぜ起きたのか 近代化をめぐる共鳴と衝突』中央公論新社	6. 最初と最後の頁 46-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 危機のなかの清朝	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小松久男編『歴史の転換期[9] 1861年 改革と試練の時代』山川出版社	6. 最初と最後の頁 26-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 978
2. 論文標題 20世紀中国における人口論の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 白鳥庫吉の東洋史学 史学史的考察として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 渡邊義浩編『中国史学の方法論』汲古書院	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 76巻1号
2. 論文標題 中華民国初期における大總統就任式典	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 79-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 義和団をめぐる記憶と中国ナショナリズムの位相	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 川田順造編『ナショナル・アイデンティティを問い直す』山川出版社	6. 最初と最後の頁 184-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋 ネイションを越えて』汲古書院	6. 最初と最後の頁 235-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉澤誠一郎
2. 発表標題 旅大回収運動(1923年)再考
3. 学会等名 史学会第117回大会東洋史部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉澤誠一郎
2. 発表標題 辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆
3. 学会等名 第67回日本西洋史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉澤誠一郎
2. 発表標題 「文人」瞿秋白の革命ロシア体験
3. 学会等名 史学会第115回大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉澤誠一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 35
3. 書名 17～19世紀の中国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----